明治村だより

1998 Spring

春号

Vol.11

平成十年三月十日発行（季刊）

明治村だより　第十一号

目次

近代の洋装
男子大礼服について……植木淑子　2
特別展「男のおしゃれ」……7
長崎居留地二十五番館ゆかりの人
J・F・コルダー……中野裕子　8
明治村茶会案内……13
春の明治村……14

表紙写真・白鞠子地垣に桜文様小袖（部分）

『明治村だより』

第十二号（平成十年夏）発行のお知らせ

発行時期　平成十年七月（予定）

申込方法　『明治村だより』第十二号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料一四〇円分の切手とともに封書にて犬山事務所宛へお申し込み下さい。

謹告

本年三月末をもちまして明治村東京事務所の全ての機能を犬山市の明治村へ移すことになりました。

尚、今後は名古屋鉄道（株）東京支社内（電話〇三―三五六三―〇〇〇二）に明治村東京連絡所を設置致しますのでご利用ください。

平成十年三月十日発行
『明治村だより』第十一号（平成十年春）
発行　博物館明治村
愛知県犬山市大字内山一番地
電話（〇五六八）六七―〇三一四　〒四八四―〇〇〇〇
製作　求龍堂

特別展

男のおしゃれ

明治ファッション点描

平成10年3月21日(祝)～5月31日(日)　三重県庁舎一階特別展示室
明治期の男性衣服・小物・錦絵・書籍等約五十点を展示。

人間にとっておしゃれとは、とどのつまりは他人に見せるためのものであって、必然的に外の社会で活動することの多い男性の方が、基本的にはおしゃれであるといえる。

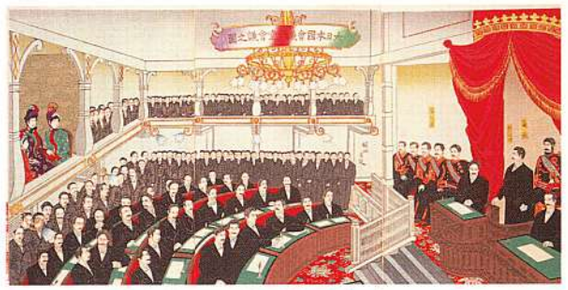
江戸時代までは封建社会の階級によって、着物に細かい制約があり、着ているものを見ればその人の属するレベルがたちどころにわかる仕組みになっていた。徳川幕府は華美な衣裳を諫めるため、たびたび禁止令を発布したが、これはとりもなおさず一般庶民のおしゃれ熱が高まっていた証拠である。他人の目に触れない着尺の裏地に贅沢な絹物を使ったり、羽織の裏に大胆な模様を染め抜いたりと、それぞれ工夫しておしゃれを楽しんだ時代であった。

明治時代に入ると、服装の面で女性より男性の方がより早く洋風を取り入れた。自分の好みにまかせ自由にいろいろなものが着られるようになったのは画期的なことである。

男性の洋服は、まず幕末の軍装から端を発した。これは江戸時代の農民の仕事着からそのヒントを得たといわれ、動きやすくかつ脱ぎ着が容易な服が考案されたという。機能的であるということが、洋服の第一の利点である。明治新政府による諸制度の整備にともない、さまざまな職場に洋風の制服が取り入れられ、警察官・郵便夫・鉄道員などの服制がそれぞれ定められた。ついで明治五年、宮廷における礼服を、それまでの衣冠束帯から洋服に改めるという達しが出されて公式の場での着用が義務づけられた。明治二十年代には現在の背広が登場、一部のハイカラ趣味の人々が着用しはじめると徐々に流行して、明治三十年代後半になると、一般男性の日常着として定着していった。また帽子・ステッキ・金鎖のついた懐中時計・こうもり傘などの小物も同様に流行し、トータルファッションとして文明開化の姿を象徴した。

幕末から明治にかけて特色ある男性ファッションの歴史を辿ることにより、人間とおしゃれの楽しい関係を紹介したい。

文官(勅任)大礼服　明治19年制



大日本國會議事堂會議之図　楊州周延　明治23年

長崎居留地二十五番館ゆかりの人 J·F·コルダー

中野裕子［当館学芸員］

昭和41年、長崎市南山手町から明治村へ移築された長崎居留地二十五番館は、長崎の居留地時代の雰囲気を残す建物である。長崎湾を眼下に望むこの建物の旧所在地の周囲には、未だ時を忘れたかのようにその名残のある建物が何棟かひっそりとたたずんでいる。ところでこの家の一番最初の住人J.F.コルダーが、明治時代の日本の近代化に多大な貢献をしたことはあまり知られていない。これまでは「英人造船技師」というたった六文字でしか語られていなかったが、彼が来日して日本の土となった二十五年間に果たした役割は、近代日本の産業、特に造船業において多大なものがあった。今回はディレクトリーの記録を中心に調査を行った。しかしディレクトリーは、在日外国大使館・企業の住所録と職員名簿および外国人居住者の住所録という性格上、人物像を浮き上がらせるほどのものとはなっていない。

ジョン・フルトン・コルダー（John Fulton Calder）に関しては、彼の死を報ずる長崎居留地の外国人向け新聞「ザ・ライジング・サン・アンド・ナガサキ・エクスプレス（The rising sun and Nagasaki express 以下ナガサキ・エクスプレスと略す）」の一八九二年（明治25）5月25日号に詳しい。

コルダーは一八四七年にスコットランドのエディンバラ近郊ミッドロジアンで生まれた。グラスゴー郊外のレンフューにあるロブニッツ造船所（Lobnitz & Co.）に勤め、明治に改元する直前の一八六七年、蒸気船コケッテ号（後に赤龍丸と改名される）の機関士として二十歳の時、日本にやって来た。彼がどのようなエンジニア教育を受けたかは良く知られていない。彼の育ったスコットランド中部は当時有数の先進的な工業地域で、グラスゴー大学を始めエンジニア教育の優れていることで知られている。また安価な鉄・石炭そして鉄製品の生産地に隣接していたこともあり、十九世紀半ばから造船業が集中した場所でもある。グラスゴーのクライド（Clyde）川沿岸は、ニューカッスルのタイン（Tyne）川沿岸、リバプールのマージー（Mersey）川沿岸、北アイルランドのベルファストに並んで造船業にとって重要な土地で、特にクライド川沿岸にはイギリスを代表する造船会社が軒を連ねた。このような環境で育ったコルダーは、門前の小僧式に、学校で専門教育を受けなくても、多くの造船所に囲まれて知らず知らずの内に知識を身につけるということも充分ありうる。またナガサキ・エクスプレスによれば、コルダーは勤めていたロブニッツ造船所の経営者の親戚筋にあたるということなのでその可能性は大いにある。

日本でのコルダーの活動は①来日直後の長崎・ボイド商会（一八六七～七六）、②横浜・三菱製鉄所（一八七六～八〇）、③神戸・大阪鉄工所（一八八〇～八四）、④長崎造船所所長からその死（一八八四～九二）の四つに分けらる。

①来日直後の長崎（一八六七～七六、慶応3～明治9年）

来日直後のコルダーは長崎のボイド商会（Boyd & Co.）でエンジニアとして働いた。

J·F·コルダーの墓

この内の約二年間、後に神戸で一緒に仕事をすることになるハンター（E.H.Hunter）とともに仕事を行なっている。ハンターはアイルランド出身で、オーストラリア・香港・上海を経由して来日し、明治12年（一八七九）、大阪安治川口に大阪鉄工所を興した人物で、現在では神戸・北野の「ハンター坂」という通りの名や、同じく神戸の王子動物園の中にある「ハンター住宅」の所有者としてその名を残している。ボイド商会は、造船に必要なエンジンやボイラー機関の製作などを業務としており、この業種では長崎で中心的な存在であった。

②横浜（一八七六～八〇、明治9～13年）

コルダーはボイド商会が横浜に支店を開設するにあたり、その準備や支店開設後の運営に携わるため横浜に転勤となったが、ボイド商会は郵便汽船三菱会社（日本郵船（株）の前身）に合併吸収され、造船・修理部門は三菱製鉄所（Mitsubishi Engine Works）となった。コルダーの仕事は従来通りで移籍し、横浜には約五年間滞在した。横浜滞在最後の年、明治13年（一八八〇）には三菱製鉄所の支配人となっている。

余談だがこの頃の造船所は英文表記ではShipyardやEngineworksとなっているが、日

本名は殆どが「製鉄所」「鉄工所」である。これらの呼称は現在のような製鉄所を意味せず、船の建造に必要な「鉄」を加工する場所を指すところからきている。

③神戸（一八八〇～八四、明治13～17年）

大阪に移ったコルダーはハンターと共に大阪鉄工所（Osaka Iron Works 現在の日立造船（株））の運営に参加し、エンジニアとして最高の地位に、ハンターが事務・営業部門の最高の地位となった。

大阪鉄工所におけるコルダーの功績は、関西初の木製の乾ドックを完成させたことにある。乾ドックは大きな船の建造や修理には必要なもので、満潮時に船をドックの中に入れ、干潮時に扉を閉鎖し排水することにより、建造や船底の清掃・塗装・修理などの作業が容易になった。これまでは木造船の建造・修理が中心であったが、次第に鉄船建造・修理へと移り、近代的な造船所へと進展していった。

当時は行っていない。

④長崎造船所所長からその死（一八八四～九二、明治17～25年）

大阪で約六年を過ごした後、明治17年郵便汽船三菱会社が官営長崎造船所の貸与を受けた際、大阪鉄工所から引き抜かれたコルダーは技術部門の支配人に就任した。この当時長崎造船所は支配人二人体制で事務・技術部門のそれぞれに支配人が置かれた。事務部門は日本人が、技術部門はコルダーの死後も外国人がそのポストに就き、造船技術すべてを担当し指導した。（長崎造船所は明治20年に正式に払い下げられ三菱長崎造船所となった。）

三菱社史によるとコルダーは明治17年8月5日、経理担当のデバイン（W.H.Devine）や機関士のロバートソン（D.Robertson）らとともに採用された。月給三五〇円は同年に採用された職員の中では最高額、しかも造船所の一隅の一〇号社宅（写真）を与えられており、いかにコルダーが優遇されていたかがよくわかる。

コルダーが長崎造船所で手掛けた仕事は、明治18年「鴛鴦（おしどり）丸」の建造で、この船は長崎湾内で造船所幹部や重要な来客の送迎に使用されたといわれている。続いて長崎造船所初の鉄船「夕顔丸」（写真）の建造で、明治20年に進水した夕顔丸は昭和37年まで約七十五年間もの長きにわたって、長崎市内と高島炭坑との間を航行し、人々の足となっていた。さらに明治23年には日本初の鋼鉄製船でかつ初めての三連成レシプロ機関を装備した「筑後川丸」「木曽川丸」「信濃川丸」の三隻を建造した。

コルダーは明治22年に飽の浦の社宅を

出て、浪の平（南山手）25番地に居を構えた。浪の平は飽の浦の対岸に位置し、造船所への通勤には送迎用の船を利用したと思われる。また私生活ではフリーメーソンの長崎ロッジの創設に奔走し、初代の会長に就任して居留地に住む外国人たちの情報交換の場・精神的なよりどころを提供した。フリーメーソンは職業・宗教に関係なく活動をする平和主義者の結社で、世界各国に支部（ロッジ）を置いているものである。コルダーはまた貧しい人や病気の人には施しを積極的に行うなど、慈善家でもあったことが、ナガサキ・エクスプレスに記されている。

わずか二十歳で来日し人生の大半を異郷の地日本で過ごし、日本の造船業の黎明期を築き上げたコルダーは、癌のため約一年間の闘病生活の後、明治25年5月25日多くの旧友たちに見取られて四十五年の生涯を終えた。コルダーのなきがらは坂本国際墓地に葬られている。

明治初期に日本に渡ってきた外国人にはイギリス人が圧倒的に多い。この頃来日した外国人には大きく分けて二つのパターンがある。一旗あげようと母国を離れ、当時の植民地を転々として日本に辿り着いた人、日本が国を興すためその指導者として招いた人。前者には商人等が多く、長崎市のグラバー邸としてその名を残すグラバー

長崎居留地二十五番館

長崎居留地二十五番館　居間（室内復元）

などはそのよい例であろう。後者は目的からしてさまざまな分野で教育に携るいわゆる「お雇い外国人」が多く、「お雇い外国人」にも国に雇われた人、私企業に雇われた人がいるが、コルダーの場合は私企業に雇われた、「私雇外国人」に分類される。

コルダーの出身地イギリス・スコットランドと日本の関係は、幕末文久3年（一八六三）に志道聞多（後の井上馨）・伊藤俊輔（後の伊藤博文）らとともに渡英した、山尾庸三によって開かれたといっても過言ではない。当時のイギリスは産業革命後、技術のもっとも進んだ国であることを、万国博覧会を開催することによって諸外国にアピールしていた。井上や伊藤らと同郷の長州出身である山尾は、文物や制度を視察するだけでなく、二人が帰国した後もイギリスに残り、昼間はグラスゴーのネイピア造船所で働き、夜はアンダーソニアンカレッジで学んだ。明治3年（一八七〇）山尾は帰国し、その後横須賀製鉄所事務取扱・工部大輔を経て工部卿にまでなった人物である。彼はグラスゴーでの経験を生かし、そこで築き上げた人間関係を通じていくつかの造船所の経営者のもとに日本人を派遣したり、逆にイギリス人を日本に招いて技術教育や技術の現場での指導に当たらせた。山尾が設立に尽力した工部大学校（明治11年開校）も教師陣はほとんどがイギリ

ス人であった。

明治村に移築されている長崎居留地二十五番館は、居留地建築の遺構を残す貴重な建物である。加えてここに記したように、建物にゆかりの人物が歴史の表舞台には登場してはいないが日本の近代化に多大な貢献をしていたことはとても興味深い。一昨年この建物の室内を再現するに当って、コルダーの日本での活動などから生活空間構成の参考としたが、彼の人物像に関してはまだまだ解明されていないことが多くこれからもさらに調査を進めたい。そして今後も移築されている建造物をよりよく生かすために、そこに暮らした人々の人となりを追究しその生活を伝えていきたいと思う。

土木写真展

『技術造形家（エンジニア・アーキテクト）の仕事を訪ねて』

4月11日(土)～5月10日(日)　東山梨郡役所一・二階展示室

主催　社団法人日本土木工業協会中部支部
　　博物館明治村
共催　土木写真展実行委員会
　　東日本建設業保証株式会社
監修　篠原　修(東京大学工学部教授)

この写真展は、平成八年九月に開催した写真展「近代土木遺産を訪ねて」の内容をさらに発展させたもので、前回展示した三沢博昭氏撮影の近代土木遺産の写真パネルのほか、旧佐賀線筑後川橋梁、白水ダムなど新たに十点を加えるとともに、最新技術による土木施工風景をとらえた現代のプロジェクト十五点（西山芳一氏撮影）も同時に展示し、内容の一層の充実を図ったものです。

今回の展示を通して、建設事業が果たしてきた役割や、これからの国土のあるべき姿を思い描いていただければ幸いです。

第三十二回 明治村茶会

茶入 中興名物瀬戸渋紙手 銘:山桜（MOA美術館所蔵）

大樋美術館全景

明治村茶会は、茶道を通じて明治村への親愛感を深めていただくことを目的として設立された会員制の茶会です。村内に点在する明治の建造物を実際に利用してお茶会としてご利用いただきます。

茶席

◎坐漁荘・亦楽庵席

MOA美術館（熱海）

昭和32年、熱海美術館として開館以来、尾形光琳の紅白梅図屏風や野々村仁清の色絵藤花文茶壺など多くの国宝、重要文化財の所蔵で知られる美術館からの逸品をご覧いただきます。

◎無声堂席

沢田由治を偲ぶ（常滑）

常滑市立陶芸研究所長・常滑市文化財保護委員などを歴任し、常滑焼の発展に貢献した陶磁研究家沢田由治氏の業績を偲ぶとともに常滑焼の新作をご紹介いたします。

◎日本庭園・野点席

十代大樋長左衛門（金沢）

寛文6年(一六六六)、加賀藩五代藩主前田綱紀が京都裏千家四世仙叟宗室を招いた折、同行の門人、初代長左衛門が大樋村に窯を開いたのが大樋焼のはじまりとされます。初代長左衛門は京都・楽家四代一入の高弟であり、その流れをくみ、飴釉で知られる大樋焼を広めました。その大樋焼を継承し、わが国を代表する茶陶の制作者、第十代大樋長左衛門氏の新作と金沢の銘菓で、入鹿池を望む日本庭園でのひとときをお楽しみいただきます。

点心席　三重県庁舎一階
　　名鉄犬山ホテル調製

日時　4月22日(水)・23日(木)
　　10時～16時
　　臨時会員は23日のみとなります。

会費　一五、〇〇〇円(臨時会員)
事前に臨時会員券(明治村・名鉄駅旅行センターなどで発売)をお買い求め下さい。

問い合わせ先……茶会事務局 TEL052-581-2904

明治なんでも体験

明治村遊びの広場

［無声堂前芝生地］
パターゴルフ・自転車・綱引きで遊んで下さい。
一部有料

グラスワーク教室

日曜
［工部省品川硝子製造所］
オリジナルのアクセサリーを作ってみましょう。
有料

日曜講座「明治建築種明かし」

明治建築と生活との密接な関係をわかりやすくお話しする短い講座です。
第2・4日曜
［第四高等学校物理化学教室］
毎回　11:15～11:45
3月のテーマ「雛壇から階段教室まで」
4月のテーマ「桜と蓮華」
5月のテーマ「そよ風とカーテン」

明治村親子たんけん隊

第2・4土曜
小中学生とその父兄を対象とした村内ガイドツアーを開催します。

節句飾り　期間中

各建物に雛飾りや端午の飾りをほどこします。

明治村催事

春のラプソディー

3月21日（祝）～5月31日（日）

明治はおしゃれ

明治のファッション

鹿鳴館風舞踏室再現

［三重県庁舎］
宮廷家具を配した舞踏会場のゴージャスな空間をお楽しみ下さい。

明治の衣裳でハイカラ散策

日・祝　10:30～　13:30～
ご来村有志の方が明治の衣裳でハイカラ散策、村内をパレードします。
参加者当日受付

明治をバックにおしゃれフォトグラフ

期間中　［帝国ホテル］他
明治の衣裳やカクテルドレス・ウエディングドレスで記念写真をお撮りします。

花のある風景

花を愉しむ――花空間アート

期間中　［学習院長官舎］他
春の花を飾ったテーブルコーディネートをご鑑賞下さい。

料理セミナー「春の花グルメ」

3月29日, 4月26日, 5月31日
［三重県庁舎］
春と花にちなんだ明治の味をご賞味下さい。
有料　定員30名　要予約

花と節句にちなんだお菓子づくり

4月4, 5, 11, 18, 19日
［三重県庁舎］
おいしい和菓子作りに挑戦して下さい。
有料　定員30名　要予約

樹木染め教室

土曜　［千早赤阪小学校講堂］
明治村で採れる樹木で春色のスカーフやハンカチを染めましょう
有料

野点

4月26日以降の日・祝
［日本庭園］
通常非公開の日本庭園で風雅な茶の湯をお楽しみ下さい。

入村料・駐車料金改定のお知らせ

本年3月1日（日）から入村料金・駐車料金を下記の通り、改定させていただくことになりました。

入村料金

種別	個人	団体（20名以上）	2日間有効
大人・大学生	1,600円	1,400円	2,100円
シルバー（65才以上）	1,200円	1,000円	1,500円
高校生	1,000円	800円	1,300円
中・小学生	600円	500円	800円

駐車料金

	3月―11月	12月―2月
バス	1,500円	1,500円
普通車	800円	500円
自動二輪車	200円	200円

呉服座公演

日曜
愛知・岐阜の地芝居等をお楽しみ下さい。

第22回明治村剣道大会

［第四高等学校武術道場「無声堂」］
4月12日
全国の八段以上の範士・教士が覇を競います。

卒業メモリアル

～3月末
袴姿の女性の方は入場無料です。
卒業生割引もございます。

めいじモノ図鑑

企画展「明治のタイムカプセル」

期間中　［三重県庁舎］
明治時代に使われた珍しい資料約50点を展示します。

＊都合により変更する場合がありますので、詳細については事前にお問い合わせください。